イランで男装してみたら

松本侑壬子・ジャーナリスト

男性が女装する映画は、大抵はコメディだ。逆の場合は、どうか？　古くはジャンヌ・ダルクの火刑から、最近の米アカデミー賞受賞作の性同一性障害の主人公の殺害、あるいはアフガニスタンの実話の映画化で、男装して働きに出た12歳の少女の悲惨な運命…といった具合。つまり、女性が男装すると悲劇というのが通り相場だ。

ところが、この映画は少女らが男装する話で、しかも結構笑える。ときには抱腹絶倒!!　イランの女性差別への異議申し立てを笑いに包んで見せるユニークな青春映画と言えるだろう。

イランではサッカーが国民的人気。熱狂的ファンには男も女もない。だが、サッカー場で生の試合を応援できるのは男性のみ。女性の男性スポーツ観戦は法律で禁止されているのである!!

舞台は、イランの首都テヘランのサッカー場。今しも2006年ドイツ・ワールドカップ出場をかけた試合が行われようとしている。この大事な一戦を見ようと、熱狂的なファンを乗せたバスが続々とスタジアムにやって来る。乗客の中に帽子を目深かに被った小柄な若者が混じっている。「こいつ、女だ！」と気がついたバスの乗客らは、しかし、見て見ぬふりをしてくれた。みんなわかっているのだ、「女だって、サッカー見たい！イランチームを応援したい！」気持は。

そう。サッカー場にどうしても入りたければ、男装すればいいんだ！　という少女のアイデアは、しかし、ゲートまでだった。捕まって連行された青空留置所には既に何人もの先客がいた。思い思いに男装した少女役は全員素人だというが、サッカーファンぶりが半端じゃない。会場の中から歓声が湧き上がるたびに、柵から身を乗り出して「早く出して！」「日本の女の子は中で観戦してるのに、何で私たちはダメなの？」と警備員に食ってかかる。警備側も実は何でダメなのか、誰も答えられない。「試合で興奮した男は汚い言葉を使うから、女には聞かせられない」なんて苦しい言い訳だ。

トイレに行きたい少女に、何とかスタジアムの男性トイレを人知れず使わせようと大奮闘する警官。別の警官は少女らのために試合の実況を命じられ、出場していない故郷の選手を勝手に活躍させて実況する…。スタジアム内で進行中の試合そのものはまったく映すことなく、試合の興奮と少女らの焦燥感を背景に醸し出すこの笑いはただのドタバタではない。少女らはついにラジオの本物の実況中継でイランの勝利を知り、喜びに大騒ぎをするが、そこは警察の護送バスの中なのだ。大はしゃぎの少女らを待っているのは ― と想像すると、笑いも手放しというわけにはいかない。

イランでは、今年3月の国際女性デーに集まった男女数百人を警官が殴りかかって解散させたり、ヘジャブ（ベール）から髪が多く出てセクシーに見えると判断された女性が警官に付きまとわれたり逮捕されるなど女性への締めつけが強まっていると報じられている（米エコノミスト誌）。そうした流れの中で、コメディの形をとりながら男装の少女らの真情を描くジャファル・パナヒ監督（男性）の勇気を讃えたい。

イラン映画（92分）／ジャファル・パナヒ監督

●

『　オフサイド・ガールズ　』

9月1日より日比谷シャンテシネ他、全国順次ロードショー